ルール規制行動と随件性形成行動

藤田 勉·佐藤方哉 慶應義塾大学

[目的]

これまで様々な研究で、ヒトヒ動物(ハト・ラット 等)のスケジュールパフォーマンスの非類似性が指摘 Thてきたが、Matthews ら (1977)は、この違いを 生じてせる決定因として、被験者に与える言語教示に 注目した。彼らの実験では、ヒトの電銀押し反応が教 示ではなく、動物と同じようにシェイピングの手続き により形成された時、動物実験と類似した結果が得ら れ、
放示の有無かとトと動物のパフォーマンスの遅い を生じさせることを示唆した。また, その後の研究で る 当該オペラントか言語数ホで確立された場合と、 シェイピングにより形成された場合では、 随件性の変 化に対する感受性が異なることが示されくShimoff et al., 1981), ヒトの行動を変容させる上での言語教 示の役割が重要視されるようになった。更に、このよ うな、教示によりコントロールでれた行動と、随件性 によりコントロールされた行動は、それぞれ、Skinner (1969, 1974)の区別するルール規制行動 (rule governed behavior) と随件性形成行動 (contingencyshaped behavior) に相当するものと考えられ、単に ヒトと動物のパフォーマンスの違いを説明するばかり ではなく、機能的に異なる2種類のオペラント行動の 存在を実験的に例証するという意味においても重要で あると考えられる。

本研究は、本年度日本心理学会(第47回大会)で発表された実験I・Iに加え、ルール規制行動と随件性形成行動の機能的差異をより詳細に検討することを目的とする。

実験 II

数示に従う行動 (ルール規制行動)が、新たに加わった外部行列刺激の統制下に置かれるか否かを検討する。

[方法]

(被験者) 慶應夷塾大学学部学生/名(SHI-男子) (装置) コンソールの右上に緑色のランプ(/個) を付けかのえる以外は実験[・ILと同様である。

(ナ 純) 実験セッションは6成分(1成分は6分間)から成っていて、各成分は1セッション/回ずつランダムな順序で行なられる。実験正は次に示す2つのフェイスから成っている。

NO CONTACT フェイズ;アンバーランプの上に実験I・Iで用いられたものと同じ教示うべいがついている。各アンバーランプは/セッション2回ずつ点灯されるが、そのうら/回は緑色のランプも同時に点灯される。アンバーランプのみ点灯する成分では教示ラベル通りのスケジュールが行なられるか、緑色ランプと共に点灯する成分でのスケジュールは、教示ラベルに関わりなく全て DRL 10秒である。

CONTACT フェイズ; NO CONTACTフェイズと同様に, 6成分のうら3成分はアンバーランプのみ提示, 残り 3成分は緑色ランプを付加して行なわれる・アンバー ランプのみ点灯する成分では数示うべル通りのスケジールが進行し, 緑色ランプを伴う成分では全て DRL 60秒である。

[結果]

数示に従う行動は、新たに加わ、た外部弁別刺激の 統制下に置かれ、被験者は、緑色ランプ点灯時には ボラベルに従わず、アンバーランプのみ提示の時には 数示うベルに従って反応していた。

実験 Ⅳ

実験IVでは、NO CONTACT教示、CONTACT教示をセッション内で提示した場合の教示に従う行動を考察した。

(方法)

(被験者) 慶應義塾下学学部学生 Z名(OHI, TAK-男子) (裝 置) 実験 I· II と同様

(ナ 続) 実験♥は次に示す2つのフェイズから成る。 INSTRUCTフェイズ;実験ⅠⅡと同様

HALF CONTACT フェイズ; ランプの上に教示ラベルが ついているが、実際に行なわれるスケジュールは全て DRL 30秒である。

[絽 果]

HALF CONTACT フェイズ に入ると、両被験者の反応は除々に数ホコントロールが弱まり、スケジュールによるコントロールに移行した。

〔結 語〕

ルール規制行動の一つと考えられる数示に従う行動は、 SD - RGB - rft という図式でとらえられるオペラント行動であることが明らかになった。

ヒトにおける強化スケジュールの研究(XI) ― ルール規制行動と 随伴性形成行動 ―

[目約]

放験作としてヒトを用いたオペラント条件づけえ致は、これまで様々なテーマのもとで行なわれてきた。しかし、基本的な強化スケジェールに立うまれた時の反応パターンはは、ヒト以外の動物において顕著に見られるパターンとは旋似性を持たす。被験首内、被験首間をかなりの変動性があることが知られている。このようなヒトと動物の反応パターンの違いを生じさせる変数の一つと考えられるのが放示であり、ヒトと被験はとして用いた気候では多くの場合、当該オペラントがシェイピングではなく言語的放示によって確立まれている。

本研究は、言語的数示によって形成されたルール規制行動と、強化矩件性によって形式された理件性形成行動の持つ機能対産異をシドマン型回避支援事態でき、 乗したGalizio(1977)の設告と、ポイント復得を正の強化于とする正の強化事態で再提対したものであり、 実験1、正の2つの実験で、以下の点を中心に考案した。

麦鮫【: 通常の混成(Multiple) スケジェールで カパフォーマンスと、正しい(麦寮の頭件性と一致している)、教示が付出された時のパフォーマンスとの比 動

実験I: 偽の(支票の題件性と一致していない) 枚示の効果。偽の教示には2億額のタイプ、すなわち、その教示に従うことが課題的母結果につながるような教示と、これに従っていても議記的母結果につながらないような教示が考えられ、前着の教示を用いるフェイズをCONTACTフェイズ、後者の教示を用いるフェイズをNO CONTACTフェイズとし、それぞれの教示の効果を検討した。

[方法]

(被敵者) 夫終[では3名、夫駁]では4名の学의 学生が被験者として用いられた。

(表置) オペランダムである反応レバー、弁別制数 得点表示カウンター、完了反応用スイッナが所定が住 置に設置されたシールド・ルーム内で実践で行なわれ た。弁別制数は3個のアンバーランプであり、それご れの無灯が、混成スケジュールg各コンポーネントの 更施と示す。

(手続) 実験「実験」ともに、裏は约には、1次1 10秒、DRL30秒、DRL60秒の3コンポーネントから成 る混成スケジェールが行なわれた。【コンポーネント の長さは12分間で、各コンポーネントー回ずつ提示と もってしセッションとした。実験Lia, NO INSTRUCT, INSTRUCTの2つのフェイズから成り、NO INSTRUCT フ ェイズでは通常の混式スケジェール、INSTRUCTフェイ ズでは、各コンポーネントに対応するランプの上に "10秒(30秒, 60秒)符,てから押せ"という数示う ベルを付切した状態で表験が行なわれた。3名中2名 の複発音は、NO INSTRUCT →INSTRUCT→NO INSTRUCT の順で、残りし名の被験者は、INSTRUCT→NO INSTRUCT の順で各フェイズと経験した。夷駿Ⅱは、夷駿Ⅰにお けるINSTRUCTフェイズ(正しい教示)と無験し三後、 前記のNO CONTACT→CONTACT→NO CONTACTの頂で、偽 の数示フェイズを行なった。NG CONTACT, CONTACTの 各フェイズでは数ボラベルは、INSTRUCTフェイズと同 挨3種類(10約-, 30約-, 60秒-)使用エルるが。 実際に施行すれるスケジェールは、NO CONTACTの場合: 3コンポーネント全てDRL 10秒, CONTACT の場合, 全 てORL boかである。

[絔 果]

実験」:正しい数示を混成スケジェールに付加した 場合、即座に数示に従う行動が形式され、混成スケジュールのコンポーネント間で反応率の分化が生じた。 実験Ⅱ:Galisioの結果と関なり、各被験着は、持 有な反応パフォーマンスを主じたが、数示に従ってい ると被定的信託をしつなるCONTACT フェイズではどの のは験音を数示には従わず、ルール規制行動の消去し た。

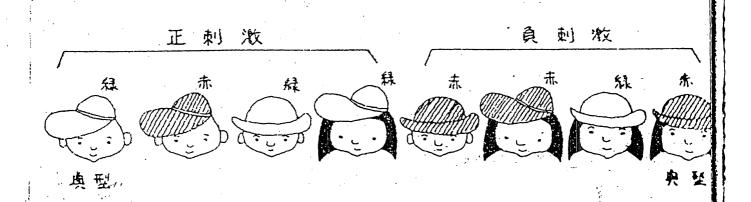
*Galizio, M. 1979. Contingency-shaped and rule -governed behavior: Instructional control of human loss avoidance. JEAB, 31, 53-70. (許済) 実験、実施に協力頂いた慶通長聖大学に理学研究室、福島直子はん、作際理念さん、漫田すみれてんに深調する。

ヒトにおける多様概念形成

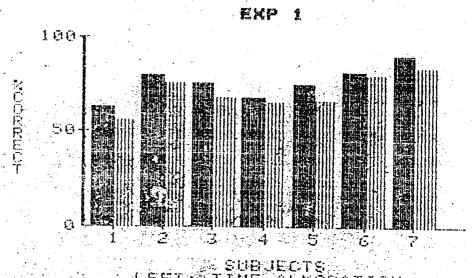
慶應義塾大学 田中 毅· 佐藤方哉

Lea & Harrison (1978) は、ヒトには困難とされる3条件のうらの2つ以上を満足する場合を正事がとする多様(polymorphose)刺激の弁別が、ハトで形成できることを報告した。めれわればLea 第の問題をとりに適用し、更に多様概念形成を困難にしている要因を検討する実験を行ったので、ここに報告する。

実験 1~3



実験1では、ヒトでは本課題の遂行が困難であるとのことから、典型刺激を含めて行った。強化は VI10 ext とし、1コンポーネントの長さは 最長 2'00" とした。被験者は大学生 7名である。各被験者の総反応従事時間に対する正刺激での相対反応従事時間、及び総反応数に対する正刺激での相対反応数の比率を以下に示す。

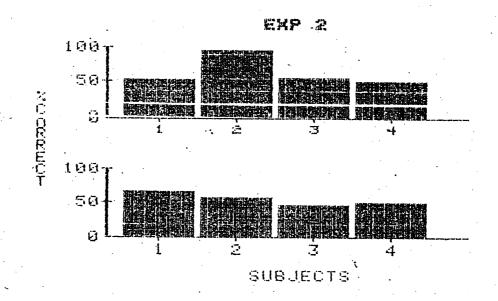


SUBJECTS
LEFT: TIME ALEOCATION
RIGHT: RESPONSE RATE

実験 2

Lea & Harrison (1978)は、典型刺激を訓練では使用せずに、後に"超正常な解発刺激"効果をみるためのテスト試行の際に呈示している。

そこで、実験2では典型刺激を除いた6種の刺激を多りですつランダムに呈示する18試行の訓練試行の後、典型刺激2種を呈示して般化を調べるテスト試行を行った。スケンユールはmult VI 20 extに、 1コンポーネントの長さは最長30 に変更した。 被験者は大学生4名である。結果を以下に示す。

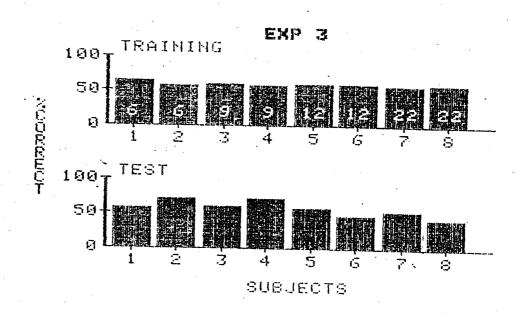


弁別が形成されたのは被験者2のみであった。 スケンュールが変わっているので明確ではないが、 典型を除外すると多様概念形成は困難になること が示唆された。

はた、テストの結果からは少なくとも「超正常な解発刺激」効果はみられなかった。

実験 3

Rea & Hanison (1978) の記しているなら度に見したのというないはいっているなら度に見したをはいているならをといるなけるないは、あ考えなられば、あったでいるならはのに人験これとでいるもは目子はりでをはでいるなりにというがは、からならのに人験これとでいるなりには、からならなりには、からならなりによるとでいるではからなりによったとこのかは、100では、100ででは

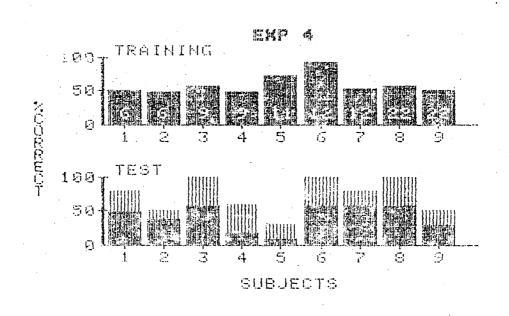


実験 4~8

多様概念形成の課題をヒトで考えた場合。 「帽子の種類」「色」の三次元として扱めり 「野球帽」「帽子」「赤 といった6つのラベルが扱われているのではない にろうか。 妃ガハトの場合には、 随件性によ つの次元上に強化の勾配が形成されることで弁 が違成されるのかもしれない。としそ うでめ らは、各次元でのラベルに加算性をもたせる で、多様概念の形成か容易になるものと思われ 実験4では3つの次元を1円、10日、100円と 各次元の値を表,裏とすることにした。突歇 は漢字を使用し、各次元の値は「明一暗」 「大一小」とした。この場合うべルはら煙 ならか、有標性に関する方向性が存在する。6では「人面月」「テェスのナイト」「自動 6では「人面月」「ナエスのナイト」「自転車の絵を使用し、各次元の値は「お向き」「人向 とした。実験5,6では方向性か一致してい条件も実施して比較している。意験2では、 元の他の差異が弁別形成に難見きの違いをもた すかを検討した。Leal Harrian (1978)の課題1 刺激の数が少ない為「概念形成」とはいえない のであったが、実験4~7では刺激の数を増し この点を改善している。実験8では次元間の加算 性を調べる目的で、人相の評定を行った。

实験 4

東大田山田 で100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」では、100円」が、100円」では、100円では、10

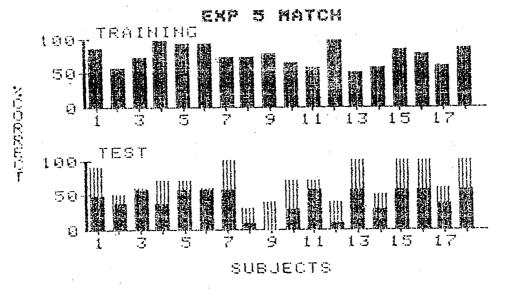


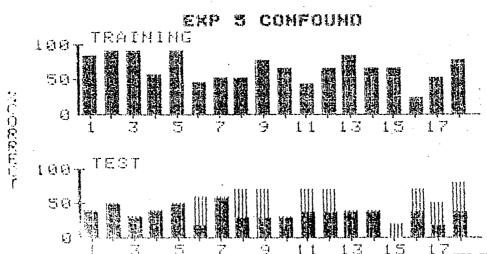
テストに於て弁別が形成されたのは被験者1,3,6,7,8であった。被験者3,6,8は規則を言語報告した。この結果は、次元間の加算性が多様概念形成を容易にすることを示唆する。年齢差はなかったとかるべきであろう。

买 聚 5

通常次元とはばれるものには2極があり、そのうではかるととするかは仕意である。ハトのうにとするかは仕意である。ハトのうに弁別刺激が物理的次元として一般能する場合により次元の世が形成されるから、陰化の効果が次元に反映しにくいのではないをでうか。

実験5では、「明るさ」「高さ」「大きさ」の実験5では、「明るさ」「高さ」「大きな」ので、 で記録では、「明一暗"「高一低"「大一小"度 では、「明一時"「高一低"「大一小"度 では、「大一小"では、 では、これらの漢字には有標性と 呼ばれるが向性が存在する。そこで、このす何性 の一般性を検討することとした。

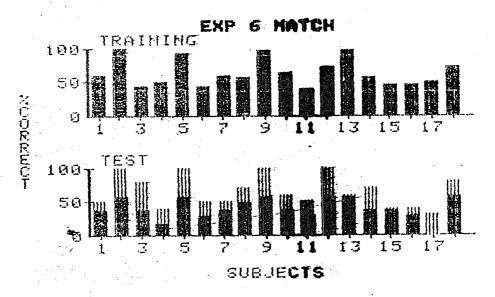


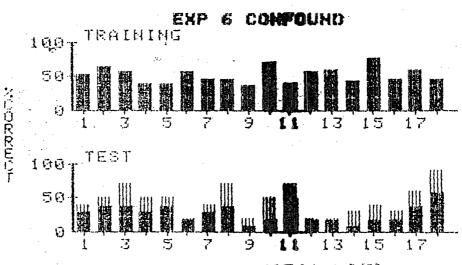


一段条件では9名の被験者に概念形成が認められた。不一段条件では概念形成が達成された被験者は1名もなかった。

実験 6

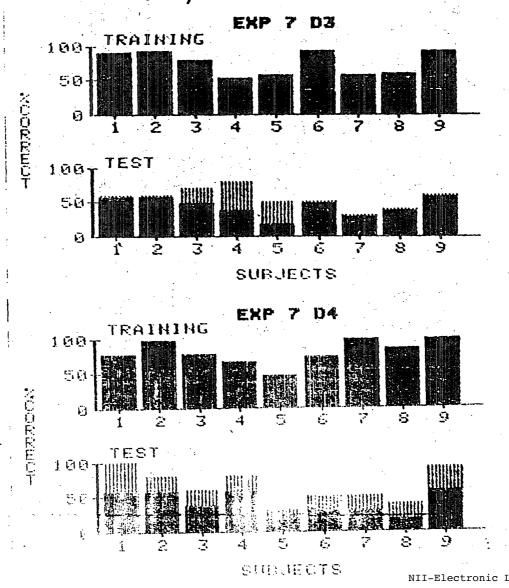
実験6は、硬貨を用いた実験4と同等の条件で
方向性を検討したものである。但し、用いた刺激は「人面月」「チェスのナイト」「自転車」の絵で、各次元の値は右向き、左向きとした。

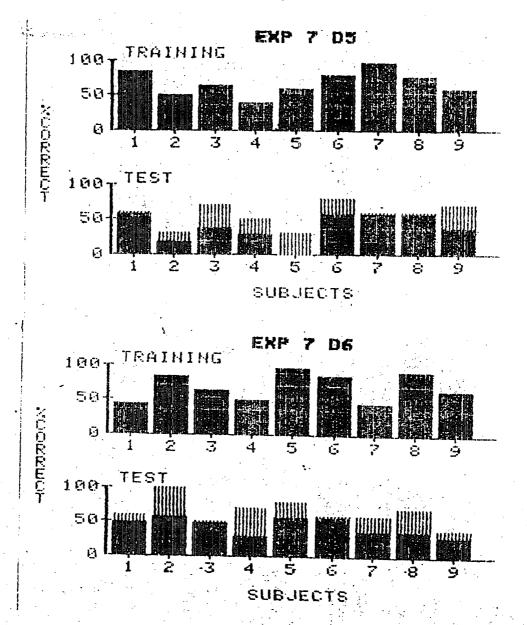




一般条件では6名に概念形成が認められたか、一般条件では1名のみであった。

实験 7



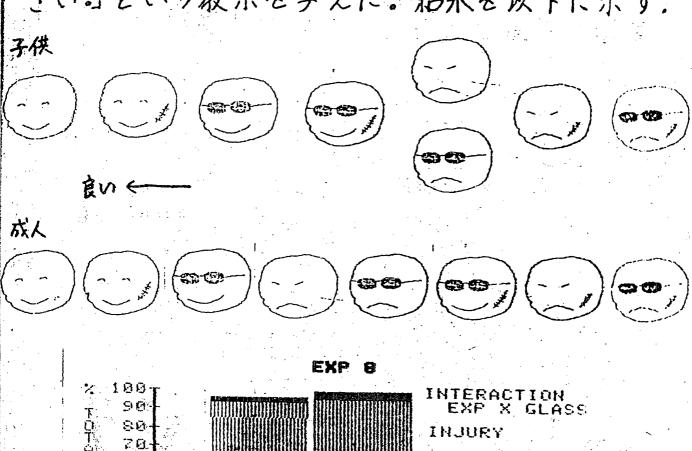


距離が増す程,概念形成が容易になる傾向は認められなかった。その理由として、距離3,5の場合,被験者は総和の大小ではなく、偶数一奇数に合う、で課題を解決していたためであることが、言語報告及び反応パタンから示唆された。

実験1~7を通じて、概念形成が達成されたと思われる被験者でも、規則表現できない場合が非常に多かった。年齢差も認められなかったことから、多様概念形成には言語が貢献しないことが示唆される。

実験8

実験8でも次元間の加算性を問題とするが、4別学習の課題ではなく、"人相の評定"を行った。刺激は「表情」「黒メかネの有無」「傷の有無」から成り、被験者には「良い顔の順序に並べて、からない。という教示を与えた。結果を以下に示す。



CHILD ADULT
SUNGLASS
CHILD ADULT

子供、成人共に両端に典型刺激が位置するのは、超正常な解発刺激」効果を示すものである。成人のは、多様概念でいう正刺激と負刺激に

相当する刺激が分離している。子供の場合の入れ、換りは、表情の効果が大きいためである。と分散分析の結果から結論できた。

考 察

文 献

ea, S. E. G. and Harrison, S. N. (1978)

Discrimination of Polymorphous stimulus sets by Pigeons.

Quarterly Journal of Experimental Psychology, 30, 521-537

Rosch, E. and Mervis, C. B. (1975)
Family Resemblances: Studies in the Internal Structure of Categories.
Cognitive Psychology 7, 573-605

追記

ここで報告した実験の全ては、平野敦子の昭和57年度慶應義塾大学文学部心理学専び卒業論文; とトによる two out of three Polymorphous Concept Formation に関する一実験」において行なられた ものである。

内旧早苗·佐藤玄鼓

目的:社会的行動を、行動分析的枠組からとらえ、 "社会的"ということは、 の意味を より深く 検討 すること。

一般的方法

被颗者: 幼稚園及び保育園の年長児 13名(86,87)

(5オ9ヵ月 ~ 6オ8ヵ月)

: 絞力-ド 3tx x Z (G; 女o子, C; ネコ, M; なご)

ネズミa人形 フョ

経カードによる ジャンケンをモナーフヒした ケーム

被験者 実験者1 実験者2 10050ha 4027.914 人形 血上仁置<? です!」 記 邻 カードを 3枚、相手に 見えな いようにして 持つ [LI5, 12110. カード 1枚を テーフッル上に 表向きに 出す 反応と記録 基石を 与える 巷石を 布袋にしまう

Fig. 1 一般的手続き 一級販金aチャンスタ1ム-

実験「

目的: †別り行動の女が果と †品力行動の生起の関係を調べる。

方法: (口述)

結果 と 考察:

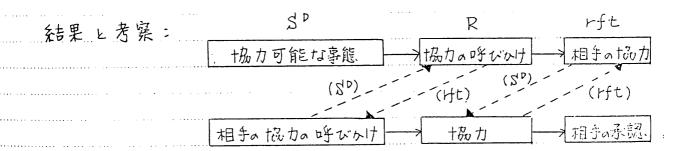
1. t協力を呼びかける行動 別つのオペラント・クラスヒして +協力の呼びかけに応じる行動 区別すべきである

2. 相手が存在するとき 非合理的 TJ 行動が 生起する これこら 社会的行動 と言える

実験Ⅱ

目的二十分カニ関する スコロオペラント行動の それどれの 三項強化 随件性 ヒ、相互の関係を明らかにすること。

方法: (口述)



実験Ⅱ

目的: 十分力を好かける行動を形成すること

方法: (口述)

新果L考察: 2名中 1名 形成 In 成功

まさに 相手の協力に 強化されている

31.

自閉症児の「クロス・モーダル障害」

:刺激統制の観点から

筑波大学 大野裕史・小林重雄

自閉症児において頻繁に観察される症状として、ことばの障害が指摘される。 開症児の「認知機制」に関する実験研究は、ことばの障害の基礎として「閲覚ー視覚クロ ス・モーダル障害」の存在を仮定した (Bryson, 1970; Hermelin & O'Connor, 1964; Mo rton-Evans & Hensley, 1978; Tubbs, 1966)。 しかし、この所見に反する事実も認め られており (小林・大野, 1982; Loveas & Schreibman, 1971; Loveas et al., 1971; 大 野・小林, 1982; 大野ら, 1979)、実験的事実は必ずしも一数していない(Table 1)。

自閉症児の「クロス・モーダル障害」に関する実験研究は、いずれも、弁別学習の パラダイムが用いられている。 弁別学習の問題は基本的には刺激統制の問題である。 本研究においては、自閉症児の「隙覚ー視覚クロス・モーダル障害」に関して、刺激統制 の観点から絶對を加えることを目的とする。

実験事態による先行研究の分類

discrete

free operant

周時弁到:

Hermalin & O'Connor (1964) ≠

松時弁別:

小祢・大野 (1982)

Lovaes et al (1971)

Lovvas & Schreibman (1971)

大野・小林 (1982)

条件性弁別:

単純マッチング; Bryson (1970; #1,4,7)

恣意的マッチング; Bryson (1970; #3,6,9)

Morton-Evans & Hensley (1978)

大野ら (1979)

under lineは、「聴覚ー観覚クロス・ モーダル障害」を支持する研究である

実験の疑略

予館実驗

- 1 馴化製作,フィーダー馴化
- 2 キー押しの形成 ; 強化子の選択

突鎖 」 : 単一刺激による刺激統制

- l vis.S⁺ セッション ault CRF EXT
- aud.S+ セッション

実験 11 : 2刺激による刺激拡制

1 vis.S[†], aud.S[†] セッション

mult CRF CRF EXT

2 刺激統制の評価 mix CRF EXT

実験 II: S 時の刺激機能

vis.S~, aud.S~セッション mult EXT EXT CRF

実験 N: 条件性弁別

1 恣意的マッチング

付加刺激の導入

実験

1.1. 目的

視覚または聴覚刺激により刺激統制の形成を試みた。 なお、本実験においては1 セッション内に視覚刺激 (vis.S) 聴覚刺激 (aud.S)のどちらか一方のみを導入した。

1.2. 方法

1.2.1.被験児: 小林 (1980) の基準による自閉症児5名 (Table 2).

			Table	2 被	獫児		
		Si	S ₃	S ₃	S.	Ss	• `
CA	:	6;00	6;00	8;01	5;08	7;00	
SEX		male	male	male	male	female	
訓練歷		lmo.	lmo.	2ys.1mo.	9mos.	10mos.	

1.2.2.装置: ① 実験プース, ② 実験用パネル (操作体のキーと給餌装置がマウントさ れている), ③ 刺激反応児童制御装置 (ユニテック社、UP-600), ④ ホロホロ音提示べ ·ル,⑤ スピーカー,⑥ オージオメーター,⑦ アンプ,⑧ 6wキーライト

1.2.3.実驗刺激

vis.S:キーの後方約3cmから6wのライトを照射した。 ブース内でのキーの照 度は100 lxであった。

aud.S:実験パネルに向い、右上方にスピーカーを取付け、ホワイトノイズを提示 一した。 パネル前面における刺激の強度は70 dB であった。

1.2.4.強化子

予備訓練において強化子を選択した。 各被験児における強化子は以下の通りであ Table 3 . 強化子 った (Table 3),

	/ /		
	被験児	強化子	1 強化当たりの提示量
٠.	Š.	: ポテト・シュースト	60 m g
	S ₂	: ラムネ	1 0 0 m g
	S3 · S4 · S5	: {シュガーポン	50 m g
		チョコワ	60mg

1.2.5.手稿章: Fix. 1 麥服。

1.2.6.データ:UP-600を介して、キー押しが生起した時間がプリント・アウトされた。 このデータをもとに、機会当りの反応率と累積犯線を求めた。

1.3. 對黑

1.3.1. 緩会当りの反応率の分析 (四周, 2)

 S_1 , S_4 , S_5 においては、両セッションで S_5 に対して100%の反応率が示された。また、 S_4 のvis, S_5 セッションを除き S_5 期での無反応が観察され、刺激統制の存在が示唆された。

1.3.2.累積記録の分析 (Fig. 3)

金棒としては、両セッションにおいて、セッションの違行に伴い、S⁺下での反応 率が、S⁻期に貼して相対的に高くなっていった。

2. 奖验 II

2.1. 目的

1セッション内に $vis.S^+$, and s^+ 両条件を導入し、各の刺激による統制の比較 検討を行なった。

- 2.2. 方案
- 2.2.1. 娘驗児: 実融 1 に難じた。
- 2.2.2.義宣: ① ~ ③ (実験(に準じた。)

◎ 50ヵ スタンドライト

2.2.3.突歐则沒:

sess. 1 vis.S;50w の白色光を緑のポリカラーを通して実験パネルに照射した。 パネル前頭における原度は180 1xであった。

aud.S; 1000 Hz, 65 dB の純音を提示した。

sess, 2 vis.S;50w,500 lx の白色光を提示した。

aud. 5 ; 2000 Hz, 85 dBの数域経音を疑示した。

2.2.4.手嗣者: Fig. 4 多思。

2.3.前是

2.3.1. 機会当りの反応率の分析 (Fig. 5)

 S_{*} , S_{*} ではvis, S_{*} , aud, S_{*} に対し1005の反応がしめされた。 すなわち、 S_{*} が存在している時には必ずキー押しが自済されており、 S_{*} が統創力を有していた可能性が示唆された。 S_{*} では、 S_{*} の下でキー押

しが一度自発された後は、反応が100%生起した。

2.3.2.累積記録の分析 (Fig. 6)

 S_1 , S_3 , S_4 では、両セッションにおいて、 S^+ 下のmean rate が、 S^- 期のそれを上回っており、刺激統制の存在が示された。 S_4 においては、 S^- 期のmean rate が、 S^+ 期のそれを上回っており、vis. S^+ , aud. S^+ とも統制力を持っていないことが示された。

2.3.3.強化スケジュールの検討 (Fig. 7)

 S_1 , S_3 , S_4 の3名について混合スケジュールでのプローブを行なった。 3名 全てにおいて、多元スケジュール下の逆行との相違が認められ、vis. S^+ , aud. S^+ が キー押しを統制していたことが示された。

3. 実験 🗆

3.1. 目的

Hermelin & O'Connor (1964)は、自閉症児における視覚刺散への相対的優位を確認した後、視覚刺激への反応の制止を試みた。 そして、自閉症児の特性として「優位なパタン (視覚刺激への定位)の制止の欠如」を指摘している。 しかし、彼女らの実験では、聴覚刺激および触覚刺激へはorientation,視覚刺激へはinhibitionを要諮しており、反応の制止の欠如なのか、反応分化の上での問題なのか明らかにされていない。

実験 I, IIでは、視覚刺激 聴覚刺激は、S⁺として導入された。 本実験では、S⁻として導入し、また、継時弁別事態でキー押しを共通したオペラントとすることで、各刺激機能にのみ組点をしばり比較検討を行なった。

3.2. 方法

- 3.2.1.被験児: S₂, S₃, S₄の3名
- 3.2.2.装置:実験Ⅱに準じた。
- 3.2.3.実験刺激: vis.S; 50w,160 lxの緑色光をパネルに照射した。

aud.S; 1000Hz,65dBの純音を提示した。

- 3.2.4.手続き:Fig. 8 参照。
- 3.3, 結果 (Fig. 9)

aud.S 下での反応率がvis.S でのそれに比べ、被験児間・セッション間に共通して高率であった。

4. 実験 IV

4.1.目的

「聴覚-視覚クロス・モーダル障害」を示唆する実験の多くは、同時弁別事態を含む、条件性弁別事態で行なわれている。 また、それらは全て断続試行場面である。

本研究では自由反応場面を用いてきた。 ここでは、先の実験に関連するよう、自由反応場面に恣意的マッチングを導入し、条件性弁別事態における視覚刺激・聴覚刺激の 機能を検討する。 また、条件性弁別そのものにも検討を加える。

4.2.方法

4.2.1.被験児: 51, 51の2名

4.2.2.裝置:実験Ⅱに堕じた。

4.2.3. 突験刺激: 突線 II に準じた。

4.2.4.手続き:Fig. 10 を参照。 なお、途中から左、右の操作体に"○"と"△"の外部刺激を付加した。

4.3.結果

規党刺激条件、聴覚刺激条件の各フェイズの初発反応を取り、セッション間で正反応率を求めた。 位置反応のみを被統制反応とした場合、聴覚刺激条件の方が視覚刺激条件に応して、正反応率が高い傾向が示された (Fig. 11)。

操作体に視覚刺激を付加すると、S₂では正反応率が上昇し、付加刺激を除去した 後も、その傾向は維持された。 しかし、S₃では正反応率が0%に低下し、除去後も持 縮した (Fig. 11)。

5,のseas.8,9の遂行を詳細に見ると、基準刺激に対応していない操作体をまず押し、その欲、対応するキーを押す、という行動が形成されていた (Fig. 12)。

5. まとめ

実験ⅡからⅣまでの結果から「優位なモダリティ」を被験児ごとにまとめると、以 下のようになる。

Table 4 被験児ごとの結果

			被	20 0	児	
刺激機能	ä	滋辛餘实	S 2	S ₃	S ₄	
S *	:	総時弁別;	aud.	vis.	vis.	
:		条件往弁别;	aud.	aud.	1	
ST	:	総時弁別;	vis.	vis.	vis.	

同一被験児においても、刺激の機能は実験事態によって異なり、「優位なモダリティ」は軽調・強動児間において同定されなかった。 「聴覚ー視覚クロス・モーダル障害」として捉えられる事実を「クロス・モーダル」等の皮膚内の出来事に説明を求める以前に処理すべき要因が残っており、行動的事実が生じる条件および操作を明確にする必要があるう。

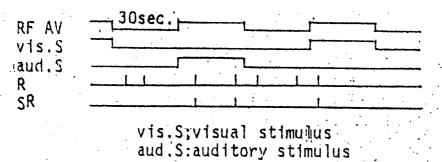
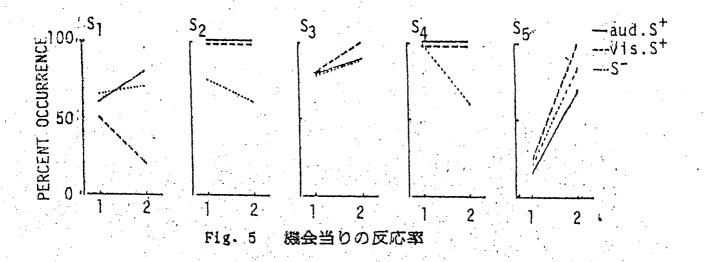
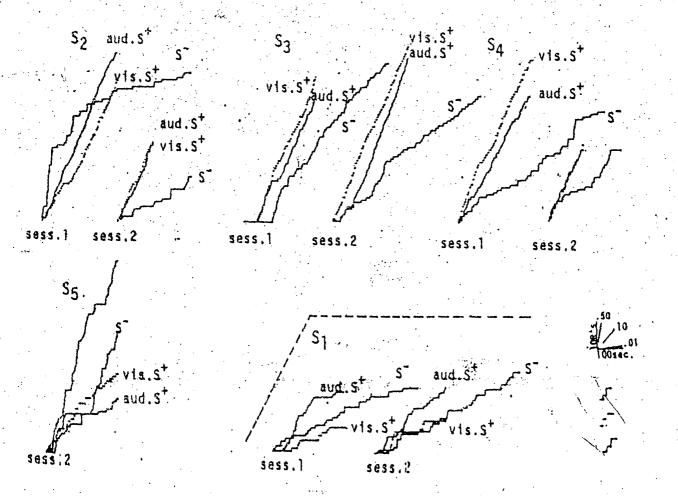


Fig. 4 手続きのタイムチャート





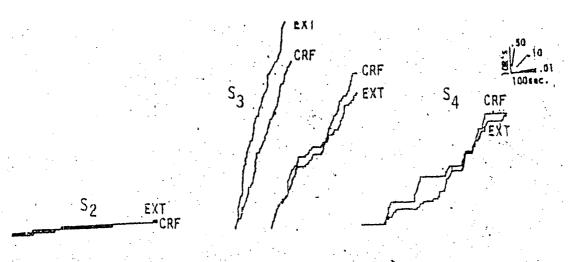
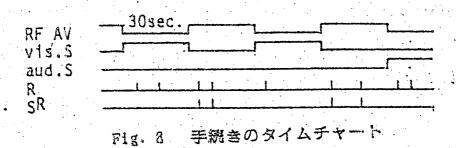


Fig. 7 緊頓記錄 (mix CRF EXT)



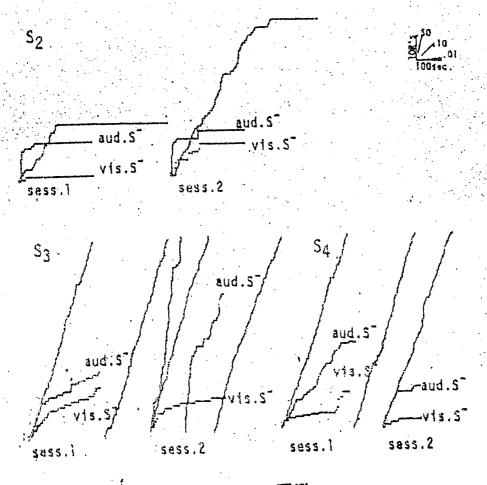
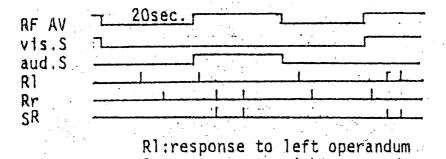


Fig. 9 累積配錄



Rr:response to right operandum

Fig. 10 手続きのタイムチャート

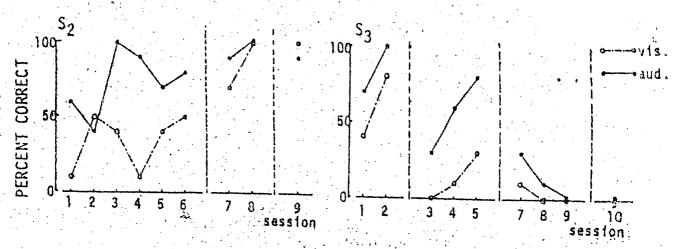


Fig. 11 正反応率の変化

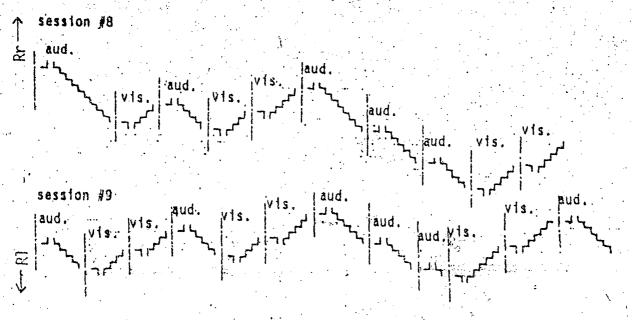
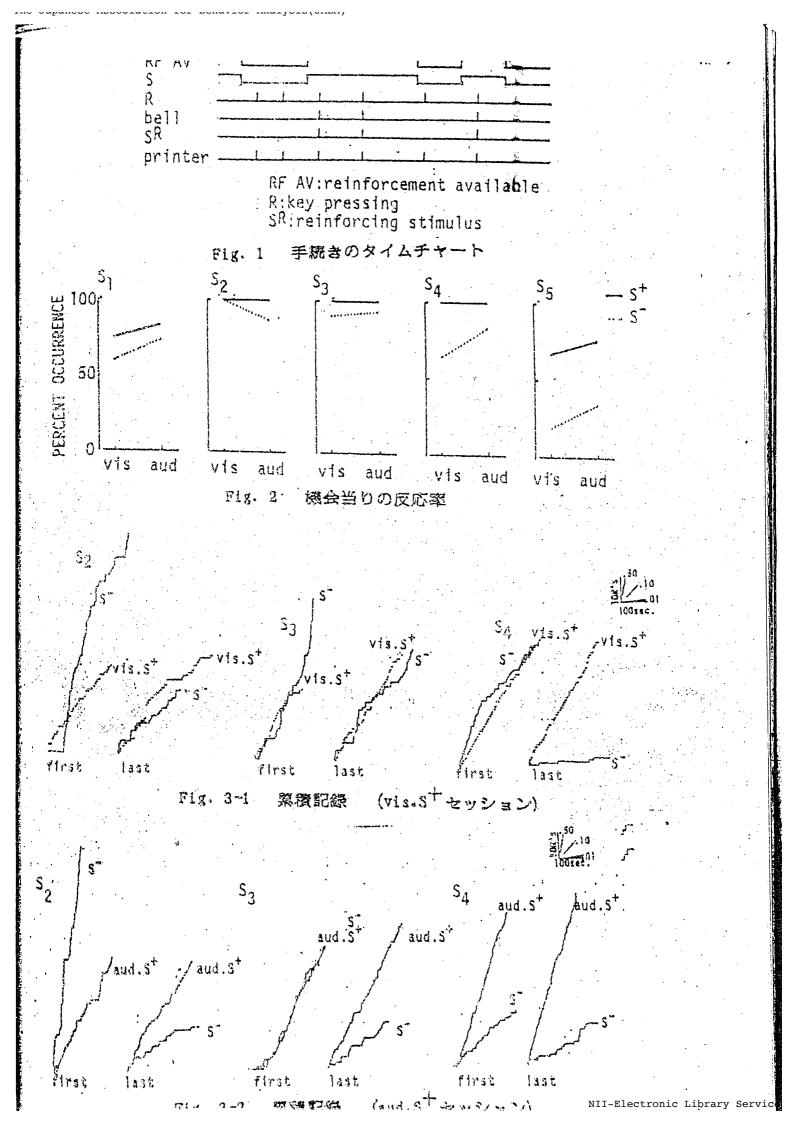


Fig. 12 S₃ の反応パタン



<参考文献>

- Bryson, C. Q. Systematic identification of perceptual disabilities in autistic children., Perceput. Motor Skills, 31, 1970, 239-246.
- Hermalin, B. & G'Connor, N. Effects of sensory input and sensory dominance on severly retarded, autistic children and subnormal controls., Brit. J. Psychol., 1964, 55, 201-206.
- 小林重雄 自閉症,岩崎学術出版,1980。
- 小林重雄・大野裕史 自閉症児の「クロス・モーダル障害」に関する行動分析的アプローチ [, 日本特殊教育学会第20回大会発表論文集,558-559....
- Lovaas, O. I. & Schreibman, L. Stimulus overselectivity of autistic chileren in a two stimulus situation., Behav. Res. & Ther., 1971, 9, 305-310.
- Loveas, O. I., Schreibman, L., Koegel, R. & Rehm, R. Selective responding by autistic children to multiple sensory input., J. Abnor. Psychol., 1971, 77, 211-222.
- Morton-Evans, A. & Hensley, R. Paired assiciate learning in early infantile autism and receptive developmental aphasia., J. Autism Ghildh. Schizophren., 8, 1978, 61-68.
- 大野裕史・小林重雄 自閉症児の「クロス・モーダル障害に関する行動分析的アプローチ II」, 日本特殊教育学会第20回大会発表論文集,560-561。
- 大野裕史・杉山雅彦・小林重雄 自閉症児の対連合学習に関する研究,日本特殊教育学会第17回大会 発表論文集。
- Tubbs, V. K., Types of Linguistic disability in psychotic children., J. Ment. Def. Res., 1966, 10, 259-276.

知能障害児の要求言語行動 藤原義博·小林重雄 (筑波大学)

応用行動分析学は、今日までに重篤な言語遅滞を伴う知能障害児の言語獲得に確実な技法とプログラムとを提供してきた。それによりて重度の言語遅滞児に形す的な言語行動レパートリィーの形成とその技能の習得を可能にしてしてして、Lovas & Newsom, 1976)。しかし、日常場面での自発的な言語の使用については必ずしも交功しているとは言い難い(Goetz et ac, 1979)。このような問題に対するアプローチレーフ近年、日常生活場面において知能障害児の主としてマンドの形成を試みる報告が担ついている(Sosne et al, 1979;Hart & Risley,1974;Rogers-Warren & Warren, 1980)。

上に述べた問題に対して主としてマンドの形成が詳分が3月3小3理由は、マンドは強化因を特定化する為に日常場面での随伴性を形成しやすい事によると思われる。また、マンドは実用性の高い言語行動であり、知能障害児のコミュニケーション行動の改善にと、2号も基本的で有用な行動レルートリィーであるう。

2個日かしながら、自然的で実用的な言語行動をいかに早期に確立するかを考える時、センドの形成にしても、それを年能にする為の条件やじのような順序でいかに形成するのかなど、言語獲得についてのマンドの位置がけも明らかではない。また、いわゆる音声言語行動にのみとどするない。動作や身振りをもなめた要求言語行動/全体についる

考慮する必要がある。

本研究では、重度の言語選擇を伴う知能障害児に出来るだけ早期に自発的で実用的な言語行動を確立することを目的に、すず、中でも最も基本的で実用的な言語行動である要求言語行動を確立するための諸条件について臨床実験的方法によって分析を加える。

実 联 I.

本研究の目的を遂行する為に、次のような条件を満たすと思われる物理的環境を設定(た。即な、の日常生活場面に近い行動標本を持つ受求言語行動で、②高頻度に生起させる場面として、知能障害児をフリーオでラント事態でアレールーム内に置き、 室内に置いた产棚の午のとどかない所に対象児の好な食物や益臭を置き、 母憩の他の人を同室させた(資料1-Fig.1)。

①当環境セッティングが上記の条件を満たし得るか、また②言語レベルの異なる各被験型にあいて、どのような要求言語行動を生起するのか、について検討を加えた。

〈結 杲〉 — 資料(1~3)参照

実験 亚

次に実験工のセッティングを用いて、同宝する人の"親密度"による要求言語行動の生色に関わる影響についる特許を加えた。

(方 法)

各被験児の母親かるいは、すったく見知るぬ成人を10分間でレール 一ム内に被験児と同言させ、それぞれについて被験児の最素電話話がservice も分析した。セッションは、日親及び見知られ人の同学についてそれ 光れスセッション行介、た。

放験児: 3名(う5/人は実験IZI用11たSubj.2)。 1、Subj. 6(CA3;3)-3 目閉症

田中ピネー (MAO:4)、PVT(2歳以下) 乳幼児浴運検査 (運動2:0、探索1:6、社会1:3) (生習1:6、理:高1:0)

2. Subj. 7 (CA 5:8) 9. MR

田中ビネー(MAI:9)、PVT(2:8)、DAM(3:10) 乳幼児発達検査 (運動 4:6、探緊 3:0、社会 4:0) 生習 4:6、言語 2:6

〈結果〉一資料、4 参照、

実験Ⅲ

本実験では、自然的で機能的な言語行動に特に乏し、作者の言語産業児を用い、意図的、統制的に行なったれたにありる受求言語行動の訓練場面と、実験エのセッティングとる並行して観察しなの点について検討した。

- (1) 和上訓練場面及びフリー・セッカンが場面を小ど小になける要求言語行動の反応レパートルーの変動について検討する
- (2)面場面で生起する要求意語行動のレパートルーの差要に
- (3)訓練効果しの関連について検討するる

机上訓練 場面

- 。Th.とSubj.が机をはせんで向いたって座り、机上に被験 見のすきなスナック類を入れたピンを3個並かる置く
- 。Subj、がピンドーチを伸した時、即座にTh.がスナックの名称を言うと共に、ピンのフタをあてSubj・ドニスナックを手渡す

〈被験见及以标果〉一首料(5~6)参照.

文 南穴

- Goetz, L., Schuler, A., & Sailer, W. Teaching functional speech to the severly handcapped: current issues. J. Autism and Develop. Disorders, 1079,9,4,325-343.
- Hart, B.M. & Risley, T.R. Incidental teaching of language in the preschool. J. Appl. Behav. Analysis, 1975, 8,411-420.
- Lovaas,O.I. & Newsom,C.D. Behavior modification with psychotic children. In Lettenberg,(Ed.); Handbook of behavior modification and behavior therapy. Englewood Cliffs,N.J.,Prentice-Hall.
- Rogers-Warren,A. & Warren,F. Mands for verbalization: facilitating the display of newly trained language in children. Behavior Modification, 1980,4,361-382.
- Sosne, J.B., Handelman, J.S., & Harris, S.L. Teaching spontaneous functional speech to autistic-type children. Hental Retardation, 1979, 17, 241-246.

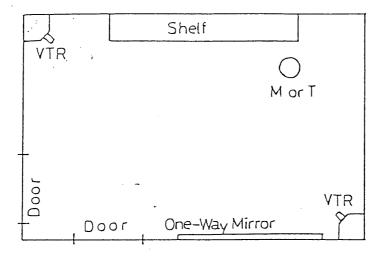


Fig.1 Experimental Setting

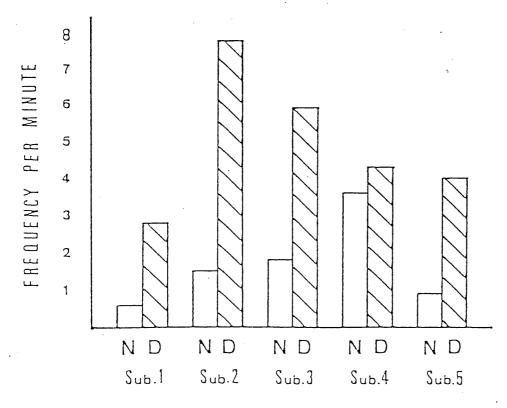
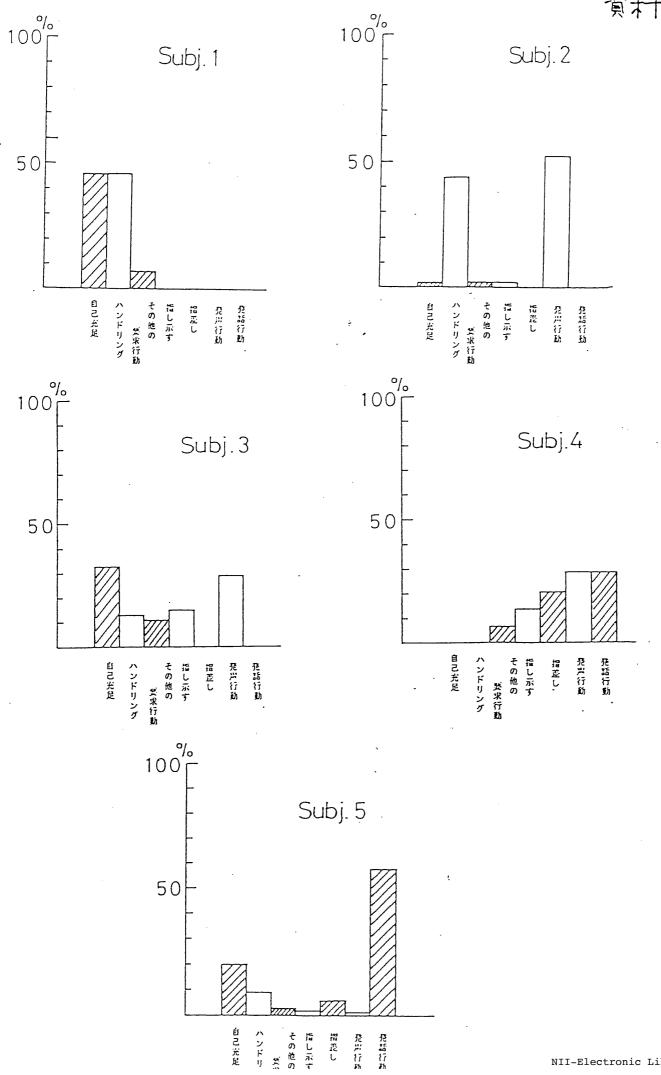
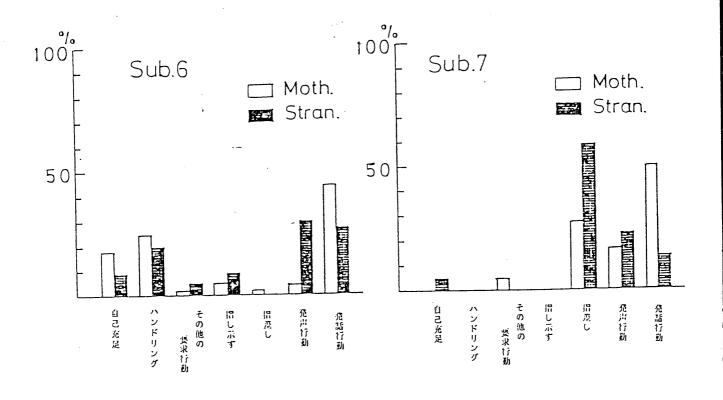


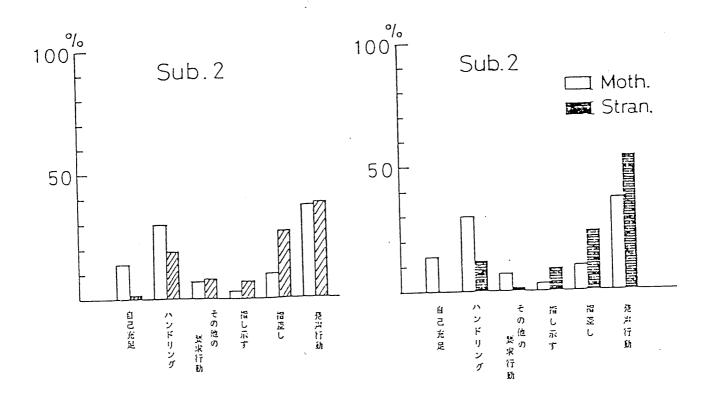
Fig. 7 李字锋逐步的公开大大文公开的内子的由京在人。

・明らかな要求行動は、見られないことが多い。しかし、特定の人には働きかけ、ハンドリングなどの要求行動が見られる。 発甲回数は多く、種類も多い。発音は不明りょうだが、短い単語な やや意味不明なところが見られるが、 数種類の発声が見られるが、発音は不明りょうで、楚珠不明。 発音は、不明りょうで意味不明である。 ・特定の則昨や、要求場面で、度々、自発性が見られる。 将定の則账や要求場面で、度々、自発性が見られる。 発声はするが、植物は少ない。発音は、不明りょう ・2部次、単語、特殊な言い回しでの要求がある。 将定の人とは、2部文以上を用いることもある。 **特定の人には、ある程度、単船で応答できる。** ある程匠の命名可能。 副 允 時々、場面に応じた単語を発する。 ・ヘンドリングや指さして収水する。 ・ヘンドリングなどの要求する。 温 ほとんどの音を摂做できる。 長い文でも意味がわかる。 要求化応じた発声をする。 ilaa 2 師文で要氷できる。 どは意味がわかる。 프 数種類の発声。 表 $\vec{7}$ o .. 0 9 0 က 温 ന 蕉 o .. 4 : 0 0 а G G ŞΊ ٠. 浜 4 'n ---# 捯 0 .. 0 0 G m 武毙 .. ٠. ٠. .. ;;; 틧 点。 c က -欺 0 0 9 9 Ö 77 群 幼児 <u>7.7</u> 끬 'n 0 0 0 0 0 哥 5 ٠. 닃 9 ú 3 લ 3 5 : 11 8 ∞ -8 作前 表 1. 9 9 姓民 $^{\normalfont{1}}$ ₹ ¥ 3 3 Sub. 1 Sub. 5 Sub. 3 哥 Sub. <u>;;</u>; <u>; '</u>







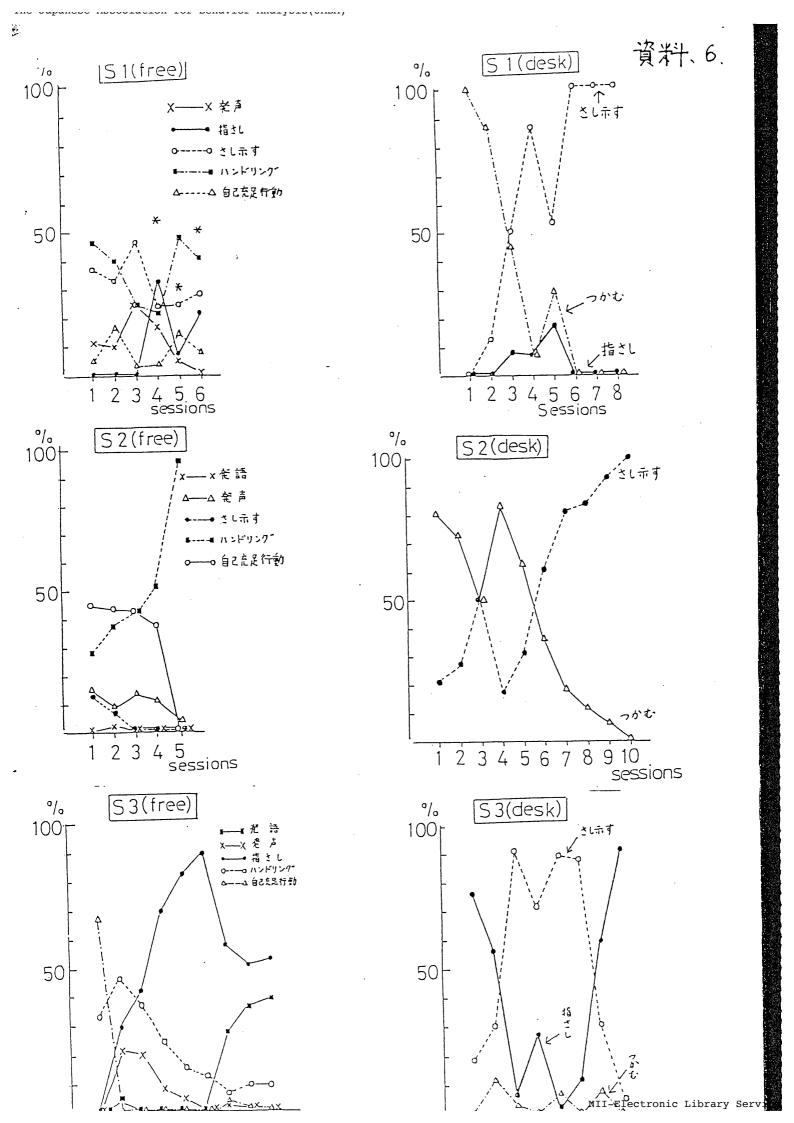


	Sul	Э.	S ₁	S 2	S 3
	Se:	Χ	M	M	M
	iac		MR	AU	AU
	\overline{C}	7	3;4	4:2	5:2
津	運	動	2;6	2;6	4:0
津守式乳	探索	·操作	1;9	1:6	1
式	社	大人	1;6	1;9	1;7
子し	公会	子供	1;6	1:3	1;9
幼児発達質問	生	食事	1;7	1;8	
從去	生活習慣	排泄	3;0	3;0	4:6
世世	一個	生活	2:0	1;8	
	- 110	理解	1:3	1;0	1;9
知	記	言語	1;0	1:01	1:6

Table 2 Profiles of Sub.

Sub.	Diag.	Language Level	Behav.Characteristic
S 1	MR	・特定の有意味 発声 ・発声頻度低い ・簡単な指示理解可 ・音声模倣不可	・こだわりが強い ・場面順応が悪い ・人見知りが強い ・指示に従えない
S 2	Aut	・無意味な発声・呼びかけに対する反応頻度低い・音声模倣不可	・多動傾向 ・注意の持続が短い ・コみ木並べのこだわり
S 3	Aut	·特定の有意味形面(無声音) ·昔声模做(無声音)可 ·基礎的指示理解可	・物ならべのこだわり・対人関係が悪い

NII-Electronic Library Service



重度精神遅滞児および自閉児における自傷行動の発生過程の解析と その制御に関する基礎研究

兵庫教育大学(院生) 東海良興

1. 自傷行動の発生過程の解析

——自傷行動に影響を及ぼす要因に関する調査(調査地:岐阜県, 昭58)

(1) 自傷行動をもつ者の性別比および出現率

				يرمرنح	72 6		~~~~	-			
校種等	· 調	查対	象 (人)	自作もつ	易行重 者	かを (く)	/ 生另	リヒヒ (%)	出	現	率(%)
	男	女	計	男	女	計	男	女	男	女	全体
小学校特殊学級	662	391	1053	24	8	32	62.9	37.1	3.63	2.04	3,04
中学校特殊学級	415	256	671	10	3	13	61.8	38.2	2.41	1.17	1.94
養護学校小学部	284	120	404	69	26	95	70,3	29.7	24.30	21.67	23.51
中学部	172	75	247	44	13	57	69.6	304	25.58	17.33	23,08
高等部	58	42	100	7	5	12	58.0	42.0	12.07	1 1.90	12.00
精薄児施設	174	130	304	37	29	66	57.2	42.8	21.26	22.31	21.71
成人施設	150	148	298	25	27	52	50.3	49.7	16,67	18,24	17.45
保育所·幼稚園	90	50	140	· 20	2	22	64.3	35.7	22.22	4.00	15.71
病院	59	58	117	4	5	9	50,4	49.6	678	8.62	7.69
計	2064	1270	3334	240	118	358	61.9	38.1	11.63	9.29	10.74

(2)	自傷行動の類型	
(4)		

2) 自傷行動の類型										(34	数)
型 型	小特	中特	養小	養中	養高	児施	成施	幼保	病院		%_
1. 自分の頭をたたく	14	4	39	19	1	19	16	7	5	124	21.8
2. 自分の残りをたたく	2	2	14	9	0	9	6	0		43	7.6
3. 頭・類以外の身体部分をたたく	3	3	3	8	0	10	- 11	1	2	41	7.2
4.物体に身体部分を打ちつける	7	2	14	7	0	12	12	6	2	62	10.9
5.毛髪を引っぱったり抜いたりする	1	0	5	2	0	10	6	2	1	27	4.8
6.四肢をかむ	9	3	26	30	0	13	14	6	0	101	17.8
ス皮ふ・身体部分をつねる		0	2	5	0	5	3		0	17	3.0
8.皮ふ・身体部分をひっかく	2	0	12	4	5	11	10	2	0	46	8.1
9.かぐぶた・爪などをむしったり、はがす	6	2	11	6	5	20	20	3		74	13,0
10.眼球など身体部分をほじる	3	2	4	1	1	3				17	3.0
11、呕吐したり、反すうする	1	0	3	0	0	3	5	1	0	13	2.3
. 12.その他	0	1	0		0	. 0		0	0	3	0.5
	49	19	133	92	12	115	105	30	13	568	
ひとり当り平均類型数	1.53	1.46	1.40	1.61	1.00	1.74	2.02	1.36	1.44	1.59	

(3) 自傷行動のモチベ	<u>ーショ</u>	ョン								(%)
モチベーション	小特	中特	養小	養中	養高	児施	成施	幼保	病院	全体
1、自己剌激として	4.0	10,5	5.3	5.4	8.3	13,9	24.8	13.3	0	11.1
2. 要求行動として	6.1	0	18.0	3.3	8,3	9.6	1.9	30.0	69.2	10.9
3、回避行動として	67.3	47.4	27.8	45.7	33.3	24.3	41.0	30.0	15,4	36.6
4.接近行動として	10.2	21.1	9.0	6.5	16.7	0	1.9	10.0	0	6.0
5、2~4を未分化的に	12.2	15.8	39.8	38.0	25.0	51.3	30.5	16.7	15,4	34,9
6.その他・	0	0	0	1.1	8.3	0	0	0	0	0.3
7.不明	0	0	0	0	0	0.9	0	0	0	0.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100,0	100,0	100.0	1000	100.0	100,0

1983年度 日本行動分析研究会 総会 研究 発表 質料

重度精神遅滞児に対する模倣指導の検討

--- RESPONSE FUNCTIONALITY の観点から ---

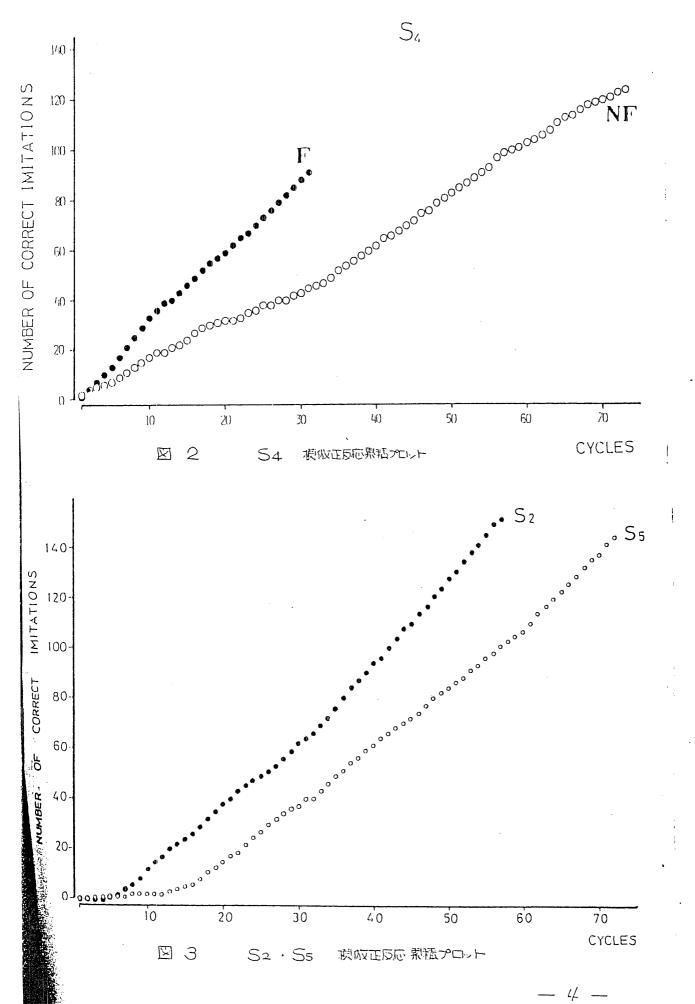
点で(村料を扱ったい)動作(()計)が原際と条件をそろ之に上で、上記の検討を行なうことを目 的とした。

2. 方志

- 1) 被赊见 CA 8:10~16:10、模倣プリテストと指導前ベースラインで模倣正反応 率 25% 以下 () 精質質認在学児、68。 遠載寺式発達検查() 言語、知的於庭が全児、1 才6 ヶ月以下,
- 2) 実験計画 各装験児(以下、S)につき1日1回、10~30分、週1~4日の個別訓練 を3~5ヶ月行存。后。訓練期を2期に分け、各期4反応を同時訓練(concurrent training: Schroeder, Baer 1972) UE。 各反际について、functional (F) - non functional (NF)の2種の結果操作を加之巨(表1)。まに開始条件(中,NF)によっ てSを2群に分け、訓練期で条件を反応した(F→NF: Sr S2 S3; NF→F: S4 S5 S6)。

	表 1 訓 縣	泉がと F・NF 条	件の結果操作			
	モデルン反応	functional	non functional			
	右手を前にさし出す	ていひらに原子をおく	くちに菓子を与之る			
1	コップに配いる	コップ内の依料を与之る	別のコップの飲料を与える			
끢	ひきだしを引く	中にある菓子を与之る	くちに菓子を与之る			
	ひしゃくを右耳にあてる	ひしゃく内のスピーカーから曲をながす、菓子をくちに与之る	くちに菓子を与之る			
	くちを貼ける	くちに東子を与之る	手に東子を与2る			
2	水筒のふたをあける	水筒内の飲料を与之る	別のコップの飲料を与る			
H供	でははっていては重	中にある東子を与之る	くちに頼子を与之る			
	マグネットを金属版につける	玩具が動く. 煎子をくち に与える	くちに架子を与之る			

- 3) セッティング 訓練は複数学校の一室で行伝った。EとSは爪を停てて座り、Eの左 疫 らいも度に各1個の棚(市販カラーボックス)をおいた、棚の各段にはその訓練期で用い る模倣所材料をE・S別においた。
- 実験者は「こクやってごらん」と教示しモデル動作を示し、SONYの後IO 4) 手続き 砂火内の反応を正一誤・無反応別に判定した。正反応には5のその時の条件の結果(強化)操 作を行用い、誤・無反応は修正、介助を加之同じく結果條作を行は、日。 4反応施行を主サ イクルとし、サイクル内をランダムは順で訓練した。連続4サイクルの正反応を、その反応の 虚成基準とし、違成後、その反応の強化率を変更した。



3) 手続き 行動観察では、玩臭や日序的品をあき約20分間の50万動をビデオ銀面した。 それに基プいて、行動をリストアップレ、放験児、条件列に訓練反応を選定した(表名:工児)。 有条件は、Guess らの庭義に基づいて選んだが、レモ条件と想定した反応から作成したもの (膀に手をあてる:LH:腹につけた洗湿がさみに触れる: 弁)も含めた。LH糸件の反応は、 対応する日条件の反応と類似のトポグラフィーをもち、function が少ないと思われるもの(ダイヤルを回す:モナコップのふちとなざる:LF)を作成したり、観察された中から選んだ(折りたた引荷子にさわる雪)。 また便宜的に3つの小群に分け、小群内の順をうンダムに示範し 「訓練手続きは実験!に同じ。ただし、材料呈示は通常のように示恥の直前に行な,た。

4) 就定

ヒデオ郵画により 2名が独立に判定 した。正反応至準 に従い、正反応と 誤・無反応別に判 定した。

表2 工児の模皮訓練に用いた反応 哥 港 台に 当巨 Q舞 1. 立ち上り、折りたたみ式の椅子 1. 立ち上り、荷子の上の元具のオー にさわる トバイにさわる(音が出る) ファイルカバーをひらく 2. 絵本をひらく 3.木製の長万環木の面をたざる 3.計数器の玉を動かす 4. コップを口につける(中に飲料) 4.同筒形のプラ積木を口につける b群 1.壁の前に立つ 1.大きな鏡の前に吐つ 2. 元具のピアノの鍵盤にさわる 3. 回転荷子に触れて回す 2: 型はめ盤のつまみにさわる 3.折りたたみ椅子の背においたタ オルに触れて動かす 4. 着衣の 複部に手をあてる 4. 寝につけた洗濯ばさみに触いる 5. 元月のひしゃくをもう上げる(中に 5. 玩臭のラッパをもち上げる ポテトチップ・ス入りの観紙) C爲 1. 器(皿)を逆さにして、底をなざる 1. 元具のパトカーを逆さにし、タイヤ ₹@q

- 2.段ボールの粗から銀紙をとり 出す(中にポテトチップス)
- 3. 電話の ダイヤルを回す
- 4.平にい台の上に立ち手を上格 (前面の湖にポテトの人, た銀紙)
- 5. 酸の上のハンカチをとる
- 2. パズルボックスからパズル片をとり
- 3.カップのふちをなでる
- 4.平にい台の上に立ち手をあげ
- 5. 頭に手をあてる

3. 結 界

- 農前テスト、訓練を通じ郭定者一致率は90%以上(94~1∞%)であった。 1) 信取性
- F-LF別に関放正反応率をみると、図40ようになった。破線は、その日の 孫惟郊勢 一名条件の平均模板率であり、相対的に中条件で多く模板される傾向がおられた。工児は午後の訓 トでは、エ児(17.5→20%)、日児(32.5→25%)とも訓練の影響は顕著でほか。后。

また。初期心梗機指導に functional responces をとり入いても、その後般性の模板を期待するなら、教示やモデル行動が後続の模板行動生起の弁別刺激となってゆく必要がある。この為 functional 存模板指導をどこまで、どのように行なってゆくべきが課題となるう。実験2ではモデルの示範前に操作対象の材料に反応することがみらいた。 functional 存模板の指導でも、 表示とモデル行動の刺紋管制が重要であるので、こいらの行動への対処が意味をもとう。

・重度MR 足の模倣指導に"natural contingencies"をもち込み、functional なものにすることは、上述のように対象物の操作を多く含むことになるう。模倣を生じさせ易いとはい之、出口ら(1978)のように、その後の般化に影響を及ぼすことが考えらいる。環境との自然な相互作用の中の、social な側面、人的な相互作用をいかに functional なものにしてゆけるかに response functionality の真価がかかっているように思える。

河 交

- Baer, D.M. 1978 The behavior analysis of trouble. In K. E. Allen, V. A. Holms, & R. L. Schiefelbusch (Eds.), Early intervention A team approach. Baltimore, Maryland: Univ. Park Press
- ベア,ドナルド M. 1982 最重度遅滞者にぶける個化模版の分析と精錬,制御、日本行動分析 研究会 ベア厚土造演会資料
- 出口光、望月昭、佐藤方哉 1978 4~5才坦における般化模版の獲得と他課題への転移、日本 心理学会第42回大会発表論文集、604~605
- Goetz, L., Schuler, A., Sailor, W. 1979 Teaching functional speech to the severely handicapped: Cureent issues. J. of Autism and Developmental Disorders, 9, 4, 325-343
- Guess, D., Keogh, W., Sailor, W. 1978 Generalization of speech and language behavior: Measurement and training tactics. In R. Schiefelbusch (Ed.), Bases of language intervention. Baltimore: Univ. Park Press
- Guess, D., Sailor, W., Baer, D.M. 1978 (hildren with limited language. In R. Schiefelbush (Eds.) Language intervention strategies. Baltimore: Univ. Park Press
- Kazdın, A.E., Gresey, S. 1977 Simultaneous Treatment design Comparisons of the effects of earning reinforcers for one's peers versus for oneself. Behavior Therapy, 8, 682-673

発産遅滞乳幼児に対する発産援助 一「ホーテージ早期を行がけられまする行動分析の応用 ― 東京学芸大学清水直治,山口薫,

目的

アメリカ合衆国・ウィスコンシン州・ボーテージ市で開発された「ボーテージ早期教育ガイド」を、わが国の発達逐滞乳幼児の実状に合致するように翻案し、行動分析の原理を指導の基底とする、この療育プログラムの臨床的妥当性を検討する。

方法

- (1) 対象児 一昭和58年11月1日現在,総数80名(うち38名,
- を継続得等中、表1、2) (2) 療育目標の設定と遂行——①行動目標と課題分析……習得させようとする技能を行動の用語で明確に規定し、学習の進度に応じて、指導中の課題をさらに細かく分析し、順次指導する

何は一般なるできる。 ②補助のタイプを手続・一正反応を確実に生起させるにめに、身体的プロンプト・視覚的プロンプト・視覚的プロンプトでは をごを行い、補助をする際には、フェーディング・シェーピング・ケェイニングの手続 と必要に応じて使う

③強化----基準に到達した行動のを行直 後に、賞賛・身体接触・食物などで強化 する。

(3) 指導手順一 初回面接時に、子供の発達実施をチェックする。

以後、母子ともに「週间に「度来所し、 そこでのアセスメントを通して、いくつかの発達領域にあいて療育目標を設け、母親に家庭で子供を訓練するための療育プログラムが渡される。 毎週、家庭での指導記録をもとに、その週の指導効果を評価するとともに、次週の療育目標を設定する。

(4) 指導場所 - 東京学芸大学附属養護学校 杏林大学病院小児科 (他に、訪问指導、通信指導)

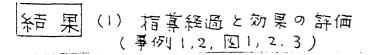
(5) 指導効果の評価 ― 発達経過表

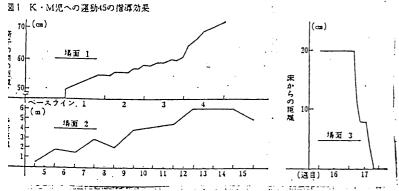
表 1 指導開始時月齡

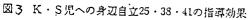
衣 1 1日 3	7 נייוניל מטיקי	1 H1
指導開始 時月齢	対象児 ()はタ	人数 ウン症
0-6カ月	9.	(8)
7 —12	4	(4)
1318	8	(6)
19-24	6	(2)
25-30	4	(2)
3136	3	(3)
37—	4	(3)
合 計	33	(23)

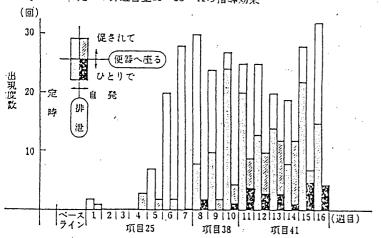
、表2 指導期間

指導期間	対象児人数
0-6カ月	- 13
7 —12	7
13—18	7
19—24	5
25-30	. 1
合 .計	38

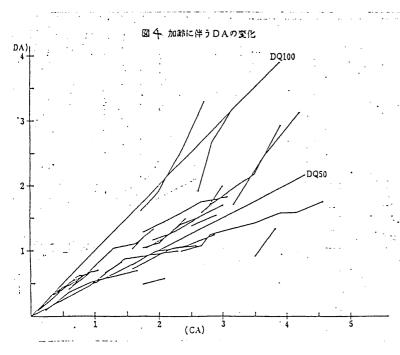


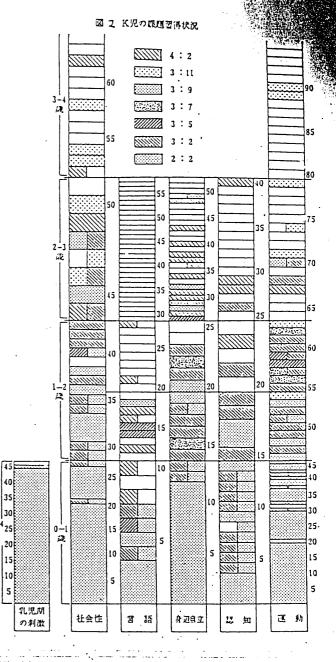


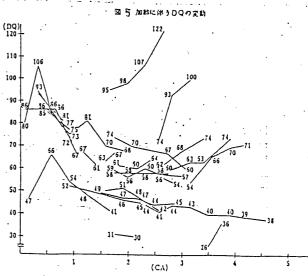




(2)加齢に伴う D A の変化と D Q の変動(図 4.5)







考察

- (1) 課題選択の直印性とその指導順序 課題配列の妥当性 E検証しつつ、何々の子供の能力と学習進度に即して、 置中な時期に直印は課題を直印な量にけ指導すべきである。
- (2) 対象児に応じた課題分析と強化刺激の登択 ――課題を分析する時のステップ9相密や重点の置き方は、個々に応じて注意深く変えるとともに、最直の強化刺激を使う
- (3) 親の養育態度と指導者としての親の訓練 ― プログラムへの参加動機でける高める配慮が重要であり、それによって指導技術が向上し、養育態度も変化しらる
- (4) 加齢に伴うDAの変化 ――習得速度に個人差はあるか、DAの停滞は全くみられない
- (5) 加齢に伴うDQの変動と障害のタイプ。――低い月齢児で変動が著るしいが、DQIO以上の上昇を示した事例が5例ある、うち2例の"ダウン症である。
- (6) 今後の課題 ――障害のタイプ, 指導同始時年齢, 指導の頻度、親の養育態度などの違いによる指導効果について分析検討する

付記 本研究は、際田征子・土橋とも子・福島見二、重藤 根治子・吉川真知子・竹井和子・金有淑との共同研 究である。